

分かち合いの精神を育み 看取りまで対応する

看護小規模多機能型居宅介護

「ケアホーム希望」 のぞみ

— 東京都調布市 —

看護小規模多機能型居宅介護は、29人以下の利用者を対象に、「通い」を中心に「宿泊」「訪問介護」を組み合わせるケアプラン作成までを一体的に提供し、24時間体制で高齢者の在宅生活を支援する小規模多機能型居宅介護に、訪問看護とリハビリテーションを加えたサービスである。たとえ医療ニーズが高くても「最期まで在宅で暮らしたい」という本人と、「在宅で看取りたい」という家族を支えるサービスとして2012年にスタートし、7年が経過するが、その数は全国でもまだ450カ所あまりにとどまる。

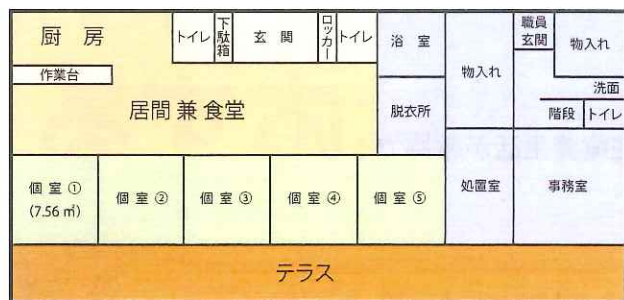
経営が難しいとの声もあるなか、稼働率がほぼ100%という、「ケアホーム希望」を訪ねた。



自治会主催の秋祭りを利用者も楽しみにしている

既存の建物を利用し 初期投資を抑える

「ケアホーム希望」は、看護師でケアマネジャーの資格をもつ金沢二美枝さんが代表取締役を務める、株式会社つじヶ丘在宅総合センターが運営している。金沢さんは1997年に、当時勤務していた医療法人で訪問看護ステーションを開業し、介護保険制度の発足と同時に独立して株式会社を立ち上げた、開拓精神が旺盛でパワフルな女性だ。



5つの個室を含む間取り



看護師（左）が介護職員（右）に医療行為を指導

2階建てアパートの1階の、3部屋分の壁を取り除いてリフォームした空間で、入口の扉を開けると町の集会所のような雰囲気がある。横長のリビングの右端にオープンキッチン、正面に個室が並び5人が宿泊できる。外階段を上った2階には、居宅介護支援事業所の訪問看護ステーション、金沢さんの自宅が並んでいる。

車で10分程度の場所に、1階に地域包括支援センター、2階に小規模多機能型居宅介護が入ったアパートもある。

「リサイクルショップ巡りや、掘り出しものを探するのが大好き」という金沢さんは、ハコモノにはお金をかけない。アパートを改修し、内装や家具を含めた初期投資

や設備維持の費用を極力抑え、できるだけ教育研修費や人件費にあてるのが運営方針だ。

「うちは給与が比較的高いことが自慢」と胸をはる。無資格者も介護職員として積極的に採用し、資格取得をサポートする。ケア技術がサービスの質を左右するとの想いがあるからだ。

医療ニーズに対応できる 介護職員を育成

医療ニーズの高い人の利用も多いため、介護職への教育に力が入れる。看護師が介護職に医療的ケアや疾病について現場で直接教えたり、外部研修に積極的に参加させたりしてきたことで、今は介護職員の多くが痰の吸引や経管栄養の実施ができる資格をもつ。

利用者の平均年齢は86歳、要介護度は1〜5で、平均要介護度は3・7となっている。パーキンソン病等の難病や、がん末期、脳梗塞の後遺症のある人たちが受け入れられているため、医療ニーズは多岐にわたる。気管切開、胃ろう、中心静脈栄養、尿道カテーテル、人



柿もぎのイベント

工肛門、褥瘡などの医療処置がある。年間8〜10人の利用者を、家族とともに看取っている。

登録者数は2018年3月以降29人で、つねに待機者がいる状態だ。地域の病院やクリニック、居宅支援事業所と連携を図り、必要に応じて看多機利用開始までの間を訪問看護でつなぐこともある。

利用者に合わせ きめ細やかに対応

近所に住む91歳のTさんは、金沢さんとは30年来のつきあいだという。亡き妻は子宮がんで放射線治療を受けたあと、アルツハイ



調理師のつくった昼食を楽しむ入居者たち

マー型認知症を発症した。医師のすすめで入院したときのこと、身体拘束を受け精神的に不安定になった。しきりに「家に帰りたい！」といわれ、金沢さんに相談して「ケアホーム希望」を利用するようになる。最期は「ケアホーム希望」で妻に寄り添いながら、職員とともに看送った。愛妻家で、妻の話になると今も目を潤ませる。

持病があるTさんは、現在要介護2だ。「通い」を週3回利用し、ときどき体調が悪くなると「宿泊」を利用する。

取材当日の昼食は天ぷらの盛り合わせだったが、魚が好物であ

るTさんには、サバの塩焼きが出された。好きなものだとすっかり食べられるので、できる限り本人の好みを優先して食事を提供するのにも「ケアホーム希望」の特徴だ。調理を担当する常勤の調理師Sさんが、柔軟に対応している。

Sさんは以前、有料老人ホームに勤務し、管理栄養士がつくったメニューどおりに食事をつくっていた。「ここはオープンキッチンなので、利用者の顔を見ながら、好みや状態に合わせて自分で考えて仕事ができるので、やりがいがある」と話してくれた。

Tさんはこの日、「今日は頭がぼーっとして、なんだかおかしい」としきりに訴えていたが、夕方になり金沢さんから「娘さんと相談して今日は泊まってもらうことにしたから」といわれると、急に表情が明るくなった。

「うちには統一した連絡帳がないんです」と見せてくれたのは、一人ひとり大きさもデザインも異なる連絡ノートだ。表紙に名前が書いてあることだけが共通している。本人の許しを得てノートを開くと、各ページに何枚もの写真が貼ってあり、コメントが並ぶ。家族にも、ひと目で利用者の表情

や様子がわかる。利用者のなかには、自宅で1人でいるときにノートを眺めて過ごすと話してくれた人もいた。回想法の効果もあるのかもしれない。

看多機の仕組みを 利用者も理解

パーキンソン病で気管切開をしている70歳代の男性、Hさんの居室の入り口の壁には、折りたたんだ長椅子が立てかけてあった。妻が泊まり、痰の吸引や体位交換などのケアを行うこともある。ベッドサイドには医療機器が載ったワゴンがあり、筆筒の上に置かれたテレビがついている。

「テレビを観ているの？ 観ていないなら目をつぶって」と金沢さんが話しかけると、じっと目を凝らした。発語は困難だが耳は聞こえ、しっかりと意思表示をする。本人も家族も自宅で暮らしたいのだが、医療的ケアが多く必要なため、自宅と「ケアホーム希望」を行き来しているのだという。

「ケアホーム希望」では、基本的に自宅で暮らしたいと願い、在



家族会と合同で行う運営推進会議

宅介護をする覚悟がある人たちを受け入れる。仕事をもつ家族の場合、家族として何ができるかを事前によく話し合う。家族にはできることをやってもらう。医療機器の取り扱いなどは、安心してできるようになるまで看護師が指導する。家族教育も重要だという。家族の役割分担について理解を得ることが難しい場合は、施設入所をすすめることもある。

強い不安感のあるMさんには、離れて住むケアマネジャーの娘さんがいる。骨折で入院したときに拘束されて不穏になり、みかねた娘さんが在宅に戻した。「私は、入院中のことをまったく覚えていないのよ。娘が帰ろうというので帰ってきたの」と話す。退院時の要介護度は4だった。

株式会社つつじヶ丘在宅総合センター

看護小規模多機能型居宅介護

「ケアホーム希望」
のぞみ



- 開設年月日 2013年10月1日
- 所在地 〒182-0006 東京都調布市つつじヶ丘 2-19-6
第三コーポ横田1階
- TEL 03-5315-5722
- 定員 登録定員29人
「通い」利用定員1日17人、「宿泊」利用定員1日5人
- 居室面積 7.43㎡
- 共用設備 居間兼食堂、厨房、トイレ、脱衣場、浴室、処置室、洗面
- 費用 「通い」：1000円（昼食代700円、おやつ代100円、
レクリエーション費100円、雑費100円）
「宿泊」：3000円（夕食代600円、朝食代400円、
宿泊費2000円）
上記のほか、要介護度別の介護サービス費
- 併設施設 居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション

Mさんに対して「ケアホーム希望」が提供する基本プランは、「通い」が週4日でそのうち1日が「宿泊」、「訪問介護」が週2日である。しかし、Mさんの場合、自宅にいる時間が長い日は精神的に不安定になりがちだ。そのため、本人と娘さんの希望で、福祉公社が提供する1時間800円の助け合いサービスを、自費で週2日、食事の準備や掃除などに利用している。看多機は包括料金だが、必要に応じて自費も含めたさまざまな

人材育成も開始し 地域をまるごとケア

サービスを利用するという分かち合いの精神も求められる。価値観さえ共有できれば、家族のいないひとり暮らしの人も、安心して在宅生活を続けることができる。

金沢さんは、利用者、家族、職員、さらには自治会などの、さ

さまざまな交流やつながりを大事にしている。

利用者の「生きる力」を引き出すため、ホームセンターへの買い物、回転寿司やカフェへの外出、柿もぎやブドウ狩りなどの外出イベントを行い、毎月発行する写真満載の広報誌『ケアホーム希望ニュース』で家族や関係者などに伝える。

自治会長、民生委員、往診医、

地域包括支援センターの職員などが参加する運営推進会議は、家族会と合同で年6回開催する。会議

では、利用者の状況を詳しく伝えるときともに、在宅介護をする家族がお互いの悩みを打ち明けたり、助け合い励まし合ったりするなど、情報交換の場にもなっている。

運営推進会議と併せて、毎回学習会も行う。「高齢者を狙う悪質商法の手口と対処法」「調剤薬局の役割と薬の管理」などがテーマで、外部講師を招くこともある。

地域交流にも積極的で、利用者が参加する自治会主催の秋祭りには、寄付や、ゲームの景品を提供するなどしている。また、全事業所の職員とその子どもたちの交流の場として、毎年納涼会と忘年会を開催する。



全事業所の職員と子どもが楽しむ忘年会

新たに看多機を立ち上げてほしいとの要望もあるが、今は人材育成に注力したいと金沢さんは話す。これまで蓄積してきた経験や知識を提供するため、先ごろ新たな法人を設立した。セミナー、講演、研修を主な事業として、医療・介護人材を育成し、9月からは育成した人材の紹介事業を始める予定だという。

金沢さんは、「将来的には『ホームホスピス』のような家庭的な雰囲気の中で、24時間ケアを提供する場をつくってみたい」とも語ってくれた。

(平岩千代子)